

 SUPER
FORMULA
LIGHTS

 **HELM**
MOTOR SPORTS





スーパーフォーミュラ・ライツは早くも前半戦最後の第3大会へ HELM MOTORSPORTSは2台そろってポイントを獲得

2022年の全日本スーパーフォーミュラ・ライツ選手権(SFライツ)は、全日本スーパーフォーミュラ選手権との併催でオートポリスでの第3大会を迎えた。全6大会/18戦で争われる今シーズンの、前半戦最後の大会といえるわけだ。第1・2大会のインターバルはわずか2週間だったが、第3大会の前には3週間と少し余裕はあったものの、この間にも他カテゴリーへの参戦があり、多忙を極めていたHELM MOTORSPORTS。それでも、第2大会での悔しさをバネに様々な準備を整え、九州は阿蘇山の中

腹に位置するオートポリスへと入った。通常は土曜日の午前中に行われる公式予選だが、今大会はタイムスケジュールの都合上金曜日の夕方に行われた。午前中2時間、午後2時間の専有走行ののち、わずか2時間後に予選が始まるというあわただしいスケジュールだ。しかもその間には2輪の走行時間も設けられており、鈴鹿大会同様に路面コンディションの読みにくい中で予選アタックに挑むこととなった。

公式予選

5月13日 (土)

天候：晴れ

路面状況：ドライ



Qualifying

セッションがスタートし、平木湧也、平木玲次の順にコースインしていくHELM MOTORSPORTSの2台。コース上で前後を入れ替え、まずは平木玲次から計測に向かう。計測3周目に1分39秒365をマークすると、そのままペースを上げていき翌周には1分38秒342をマーク。トップの車両はこの時点で1分36秒台にタイムを入れていたが、2番手以降は1分37秒中盤で、ここまでの練習走行と比べてもライバル勢とのタイム差が小さくなっていることが分かる。平木湧也は、同じように計測3周目で1分39秒台、そこから翌周にタイム更新するも、1分38秒783と満足のいく結果には届かず。2台はこれで1セット目のタイヤでのアタックを終えピットイン。タイヤを履き替え、2セット目のアタックに備えた。

残り時間が8分を切り、平木玲次が先にコースイン。

前半と同じく、1周をタイヤのウォームアップに充てて計測3周目からアタックに入った。セクター1は自己ベストタイムの周回に及ばなかったが、ここからペースが上がり、自身で課題と挙げていたセクター3で大幅にタイム更新。1分37秒920をマークしてみせた。平木玲次は続けて2周目のアタックに入り、セクター1は自己ベストタイムを更新。セクター2でもほんのわずかだがタイムを削る。しかしタイヤのピークが過ぎたか、セクター3は勢いが落ち1分38秒103。それでもそれが第8戦のグリッドを決めるセカンドベストタイムとなり、予選結果はそれぞれ8位となった。

平木湧也も2セット目のタイヤでタイム更新を目指すも、セット変更が裏目に出た形で1セット目のタイムを破ることができず。それでも平木玲次に続き、予選結果はそれぞれ9位となった。

QF COMMENTS



62 Driver HIRAKI Yuya

前回の鈴鹿大会が惨敗だったので、オートボリス大会に向けては、まずはスタンダードセットといわれるものにしてきました。戻せるものは全部戻して、また1からスタートしようという気持ちで臨んだところ、クルマも反応を見せてくれて、セットアップも進められるようになりました。ただ今回のレースウィークはこれまでと違い、予選までのスケジュールがとてもタイトです。練習走行の合間、練習を終えてから予選までの合間がとても短く、十分なミーティング時間をとる余裕

がない場面もありました。結果的に、予選に対してはセットを変更して臨みましたが、それが外れてしまい、“そのまま行けばよかったかな”という悔しさがあります。ただ、クルマの反応が思ったように現れるようになり、改善しなければいけないことも明確になりました。チームのみんなも、自分たちがちゃんと前に進んでいる感覚を持ちながら作業ができるので、鈴鹿大会と比べるとチームの空気感もいいです。このいい雰囲気を明日からの決勝にもつなげたいです



63 Driver HIRAKI Reiji

練習ではずっとセクター3で伸び悩み、そこで上位と大きくタイム差をつけられていたのですが、予選に向けてセットアップを変えたところ、セクター3で大幅にタイム更新ができました。最後に2周連続でアタックしましたが、2周目のセクター3ではもうタイヤのピークが

過ぎてしまっていました。その合わせこみが足りなかったことは反省点ですが、課題だったセクター3が大きく改善できたことはすごくポジティブなことがとじています。予選でよかったところをさらに突き詰めて、明日からの決勝に向けて準備していきます

Rd7 決勝レース
5月13日(土)
天候：晴れ
路面状況：ドライ



Race 1

あわただしかった予選日までとは打って変わって、決勝日1日目はややのんびりした始まりになった。予選結果は8位、9位だったHELM MOTORSPORTSの2台だが、予選7位のマシンがエンジン交換のために5グリッド降格になり、それぞれグリッド順は1つ昇格。平木玲次は7番グリッドから、平木湧也は8番グリッドからのスタートとなる。午前11時25分からスタート進行が始まり、定刻通りにフォーメーションラップを終え、シグナルの点灯を待つSFライトの面々。ところが、隊列の最後尾でグリーンフラッグが降られたものの、シグナルは黄色の点滅を始める。実は、シグナルシステムにトラブルが発生してしまい、これでスタートはディレイに。レースは1周減算の13周での戦いとなり、改めて午後0時5分にフォーメーションラップが始まった。今度こそレッドシグナルの点灯からブラックアウトし、第7戦決勝レースがスタート。思わぬアクシデントになったものの、気持ちを切り替えてスタートに挑む2台だったが、平木湧也はエンジントールを喫してしまい大きく後退。平木玲次は後方のマスタークラス

の1台に並ばれてしまう。なんとか2コーナーではイン側に位置取り相手をけん制するが、続く3コーナーで先行され、8番手でオープニングラップを終えることに。しかし、2周目に入ったホームストレートで並びかけると、サイドバイサイドで1コーナーへ。お互いにぎりぎりの勝負の末、3コーナーで前に出ることに成功、7番手ポジションを取り戻した。さらに4周目には、6番手のマシンに0.7秒差まで詰め寄り相手にプレッシャーをかけているとするが、相手もペースを崩すことなく、逆にじわじわと離されてしまう。レースも後半に入ると、逆に8番手のマシンが背後に迫るようになる。しかし、0.5秒までは近づかせず、決定的な場面も作らせずに周回を重ね、7位をキープしてフィニッシュ。予選順位よりも上位でゴールした。スタートで最後尾に下がってしまった平木湧也は、マスタークラスの2台を3周目、10周目にオーバーテイク。10位までポジションを取り戻してチェッカーを受けた。

Rd8 決勝レース
5月13日(日)
天候：晴れ
路面状況：ドライ



Race 2

SUPER FORMULAの予選後、夕方のスタートとなった第8戦決勝は序盤から波乱の展開となった。オープニングラップから激しいポジション争いを繰り広げていた上位陣が接触し、1台がコースアウト、クラッシュしてしまう。すぐさまセーフティカー(SC)が導入され、隊列を整えていくが、SC先導のもとオープニングラップを終えて戻ってくると、平木玲次は6番手、平木湧也は7番手にポジションを上げていた。クラッシュで1台が戦線離脱、さらにこの車両と接触した影響で1台が車両修復のためピットインしたことで、2台は2ポジションアップに成功していたのだ。さらに3周目のリスタート直前、5位を走るマシンも車両トラブルのためにピットイン。これで5番手と6番手に上がったHELM MOTORSPORTSの2台は、そろってポイント圏内でリスタートを切った。

前方とは約3秒の差をつけられてレースが再開した平木玲次は、1分40秒台半ばのラップタイムで周回。4番手より前の上位集団は1分40秒台前半から、時には1分39秒台にタイムを乗せて周回し、平木との差をどんどんつけていく。レースは序盤こそ接触・クラッシュでSCが入ったものの、その後は静かな展開でフィニッシュ。平木玲次は5位、平木湧也は6位でチェッカーを受け、正式結果では2位フィニッシュした車両がペナルティで後退し、それぞれ4位と5位に繰り上がった。HELM MOTORSPORTSはシーズン8戦目にして2台そろってのポイント獲得を果たしたが、それでも上位陣との差は明確で、残る第9戦に向け、チームはさらに車両のセットアップを煮詰めていったのだった。

Rd9 決勝レース

5月14日(日)

天候：晴れ

路面状況：ドライ



Race 3

SFライツ第9戦は日曜日の朝いちばんに行われた。ポイント獲得は果たしたものの、悔しい内容に終わってしまった第8戦から一夜。平木湧也はこの週末に試したセットアップの中で一番手ごたえのあったものに戻してこの週末最後のレースに挑んだ。一方の平木玲次は、平木湧也とは方向性を変えて最後のレースにトライ。結果的に、このセッティングの違いが2台のペースの違いを生むことになった。

迎えたスタートは、平木玲次が7番手、平木湧也が他車のグリッド降格で9番手から。2台は縦に並んだ位置関係でスタートを切ったが、平木玲次は1コーナーまでで1台に交わされ8番手後退。平木湧也は後ろから襲い掛かる1台をけん制しながら1コーナーへ侵入し、サイドバイサイドでなんとかポジションを守ろうとするが、3コーナーで先行を許し11番手となった。

さて、ここまで2戦は上位陣との差が広がっていく一方のレースが多かった平木玲次だったが、この第9戦に向けたセットアップが

ばっちりとはまったか、7番手との差は一進一退を繰り返す。7周目に1分40秒273の自己ベストタイムをたたき出すと、その後も安定したラップで周回。この第9戦は第7戦、第8戦よりも長い21周で争われたが、最後までペースを乱すことなく7番手を追い詰めていき、最後は約0.4秒差まで迫った。残念ながらオーバーテイクには届かなかったものの、最後までライバルを追い詰める走りを披露して、平木玲次は8位フィニッシュを果たした。

平木湧也は5周目の1コーナーで10番手のマシンのアウト側に並びかけたが、相手も粘り、なかなか決着がつかない。2台の戦いは4コーナーまで続いたが、ここでイン側を位置取った平木湧也がようやく前に出ることに成功。すでに9番手とは約7秒の差が開いていたが、平木湧也は挽回しようとしてプッシュ。しかし、レース中盤でいったん1分41秒台までペースダウンしてしまう。なんとか終盤には盛り返し、差を詰める集会もあったものの、10位でのチェッカーとなった。

Race COMMENTS



62 Driver HIRAKI Yuya

最後のレースはこの週末の中で一番良かったセットにして挑みましたが、まったくいいところがなく苦しいレースになってしまいました。予選までのいい流れを維持することはできませんでしたが、この週末は0からスタートし、リセットしたことで得られたデータや、2台そろってのポイント獲得という結果も出せ

ました。ただしトップとの差があるので、それをどうやって詰めていくのか、そういった課題も明確になりました。確信とまではいきませんが、トライしてみたいことも出てきたので、そういったものも詰め込み、次のSUGO大会から始まるシーズン後半戦も、さらに前に進めるように頑張っていきます



63 Driver HIRAKI Reiji

第8戦までは離されていく展開のレースが続きましたが、第9戦は終始バトルができました。エアロバランスが今までで一番よく、しっかりとグリップを感じることができたので、クルマの改善という部分に対して小さなきっかけが見えてきたのではと思っています。そう

いう意味では、最後のレースが一番収穫の多いレースだったかもしれません。最後の最後まで、攻めて攻めて、攻めたレースができました。次のSUGO大会でもさらに上を目指せるよう、今大会で得られたデータをしっかりと分析して挑みたいと思います

NEXT Race

デビューイヤーの3大会目で2台そろってのポイント獲得を果たしたHELM MOTORSPORTS。上位陣のアクシデントで舞い込んできたポイントではあるが、惨敗の鈴鹿大会に比べ、結果を引き寄せるだけの力を発揮できたことは事実だ。もちろん、まだまだ上位陣との差は大きく、課題は多い。しかし、前進した感触は今のチームにとっては大きな手ごたえだ。シーズンはここで折り返し地点を迎えるが、この手ごたえを更なる結果につなげるべく、HELM MOTORSPORTSはチーム一丸でシーズン後半戦に挑む。

